
斯波くんと城島さん

藍月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斯波くんと城島さん

【Nコード】

N2734S

【作者名】

藍月

【あらすじ】

はじめて会ったとき、彼女は黒い服を着ていた。

彼女の目じりににじむ透明な涙を見つけたとき、

ああ、この子はこんなにも静かに泣くのだと思った。

その凜とした姿は。

あいつにそっくりだった。

『城島——死んだらしいよ。』

高校の同級生の、突然の訃報。

国立の医学部に現役で入ってたから、きつと忙しくも楽しい大学生
活を送っていると思っていたのに…。

斯波は、彼の通夜に出るために地元へと向かう。

そこで出会ったのは、城島の妹。

通夜の席でもくずれることなく凜と立つその姿は、亡くなった城島
にそっくりだった。

斯波は、妹に兄の面影を重ねていく。

——なんで、城島は死んでしまったんだ？

そして、斯波は知る。

これはひとつの許されない愛の結末なのだ。

1日目 AM 9:00

はじめて会ったとき、彼女は黒い服を着ていた。

それに対して肌は病的なほど真っ白で。

伏し目がちな目をふちどるまつげは、驚くほどに長くて。

その目じりににじむ透明な涙を見つけたとき、

ああ、この子はこんなにも静かに泣くのだと思った。

その凜とした姿は。

あいつにそっくりだった。

——ジリリリリリリリ！！！！

「ああ、もうっ、うるさい」

寝ばけながら目覚まし時計をつかんで、時間を見る。

「なんだよ、まだ9時じゃんか…」

ああ、昨日クラスのやつと飲みに行つて…家に帰ってきたのが5時とかだったっけ？

まだ4時間てどこか…

やつぱ大学の近くで飲むと、家に帰ってくるのが遅くてかなわな
いや。

そんなことをぶつぶつ考えながら、目覚ましのアラームの電源を
OFFにする。

もーちよつと寝よーっと。

用済みの目覚ましをポーンと蹴飛ばして、夢の世界に旅立とうと
したとき。

「ちよつと、なに寝てんの。」

地獄の底をはうような低い声が聞こえた。枕もとには、母親が仁
王立ちしている。

「…うつせ、ばばあ」

「あんた、早く起きてよね。朝ご飯作ってやったから。ちゃっちゃんと食べなさいよ。ほら、早く！」

そう言つて、その声の主は、俺の布団を乱暴にはぎ取った。

「なにすんだよ、ばばあ。いま冬だぞ！寒いじゃねえか！」

「ほらほら、そんなこと言つてないで。はやく下降りてきなさいよ」
言っただけ言つたら、ばばあはさっさと俺の部屋を出て行く。

てか、俺の部屋に入るなつて何度も言つてんのに。聞きやしねえ。なんで、ばばあつて、あんなに厚かましいんだ？

「てか、俺今日休みなんだけど。もうちよつと寝たつていいだろ！」

「何言つてんの！夕方からだけど、みんなが集まつて一緒に行くから早く起きるつて言つてたの、あんたじゃない。」

「……は？」

「ちゃんと服も出しといてあげたから。そこ、かけてあるでしょ。

ネクタイは見つからなかったから、行くときにどつかで買つて。」

言われて、ベッドの横のクローゼットを見上げる。

そこには、めったに着ない、黒一色の服が掛かっていた。

かすかに香る、服に染みついた線香の香り。

そうだ。

おととい、急に連絡がきた。ずっと連絡を断っていた高校時代の友達だった。

「なあ、お前さ。城島と仲よかったよな。さっき、山本から電話が来たんだけどさ……」

——城島、死んだらしいよ。」

今日は、高校の同級生の通夜の日だった。

1日目 AM 9:00 (後書き)

初投稿作品になります。

どうぞ、よろしくおねがいします。

高校2年 冬

あいつ、城島と俺の仲がいいというのは、当時俺らを知っているやつからすれば最大の謎だったらしい。

中学までの俺は、まあ、中の中くらいの成績で、男友達とつるんで毎日遊んでるようなやつだった。特別優秀でもなければ、特別馬鹿でもないってゆうか、そんな感じ。

高校もそんな風に、それほど悪くない、でも良くもないところに行くだろーなーとか考えてたんだけど、何を間違ったか当時付き合ってた子が上の下くらいの成績の子で、一緒の高校に行こう！…ということになって、燃えてしまったわけだ。

高校までの受験をやつは、まあがんばればそこそこいいところにはいけるもんだ。授業もちゃんと受けてたし、内申もそれほど悪いわけじゃなかったし。

それで、無事ちよつといいとこの高校に彼女と一緒に入ったわけ。彼女には入学して2カ月後くらいに振られたけど。

なんで女つてやつは、ちよつとカッコイイ先輩に弱いのかね？

あんなに一緒に頑張ったつてのに、終わりはあつけないもんだ。さっさと俺を捨てて、今では、サッカー部のキャプテンと付き合ってる。

入学してすぐに、俺はまわりが自分よりできるやつばかりで、気が合わないことに気付いた。だって俺、真面目じゃないし。能力より上のところに入ったから、それ相応の努力をしなきゃ周りについていけないはずがないんだけど、別にいいやって思っちゃって瞬く

間に落ちこぼれになっちゃったし。あー学校間違えたかなあ。

俺は不良ではないけど、つまんねーって感じたら、授業サボっちゃえ、とか思うし。

学校帰りにゲーセンよったり、カラオケいたりしたいし。

でも、なまじ進学校なだけに、この学校のやつらは勉強熱心な努力家だったわけだ。

俺みたいに楽しく生きてーとかじゃなく、自分のために勉強するんだ！的なね。

俺からしてみると、なんだよそれ。一生に一度の青春、勉強にさげんのかよ、って目玉飛び出るほどの驚きだったね。今でもそう思うもん。まあ、あいつらが大学でも勉強一筋なのは知らないけど。

とりあえず、俺はその高校で、城島と会った。

学年1位の天才にして、恐ろしいほどできた少年に。

城島とはじめて会ったのは、放課後の生徒会室だった。2年の冬のとき。

今でも覚えてる。俺は自分がちつぽけな奴だと知っていたけれど、それでもそこそこであるとは思っていた。勉強できなくなつて、まあなんとかなるって。だって、俺よりも勉強できないやつも、駄目な奴も、世の中にはいっぱいいるわけだろ？

でも、その俺の自信を、あいつは一瞬で粉々に砕いたんだ。

それは、夕日の差し込む、冬のある日だった。

俺は提出物を忘れたかなんかの罰で、珍しく放課後まで残っていた。うちの高校の生徒会はきちんと活動していたけれど、表立ってなにか大きなことをやるというわけではなく。

存在してはいるけれど、内申目的で所属しているやつらばかり

だったんじゃないかな。そんな生徒会だから、部室も校舎のはしっこにばつんとあつて、ほんとに活動してるのかって疑問だった。

その日は珍しく、生徒会室の中に人がいるのを見つけた。生徒会室の前を通った奥にある自販機に行こうとしたら、偶然目についたんだ。もうこんな時間だし、いつも活動してないみたいだったから誰かいるとは思わなくて。なんとなく好奇心でのぞいてみた。

そこにいたのは、学年一の天才と呼ばれる少年だった。

身長は平均くらいで、ちょっと細め。今はやりの細マッチョってやつか？それに優等生の代名詞ともいえる黒縁フレームの眼鏡をかけていた。でもガリベンとかがかけてるようなやつじゃなくて、細いフレームのおしゃれなやつだった。

あいつはひとりで机に向かって、なにかを書いていた。その姿勢すらまっすぐ凛としていて、誰もいない部室でこいつは一体なにをしているんだと思った。

あいつは俺に気付くと、うん？という風に首を傾げた。

俺は一方的に知ってるけど、あいつは俺のこと知るわけない。

「なあ、お前って、あの有名な城島だろ？」

「うん。有名かはわからないけど。」

あいつはそう言つて笑った。

「きみは、斯波くんだね。2・Bの。」

そのときの俺の驚きといったら、なかったね。完全にフリーズしてたよ。

「……は？なんで、俺の名前知ってるの。」

「斯波くんだって、俺の名前を知ってるじゃないか。」

「いや、だつてお前有名だし。知らない奴なんていないだろ」

あいつはそうかなあ、なんて言つて、イスから立ち上がると俺に向かって手を振った。

「とりあえず、こつちおいでよ。廊下寒いし。お茶でもいれるよ」

そういえば、寒いから温かい飲み物が買いに、自販機に行こうと
してたんだっけ。

まあ、タダで飲めるんなら、いつか。

俺はありがたくお茶をいただくことにした。

あいつは机の端っこにあった、IHにやかんをのつけた。

「コーヒーと紅茶どっちがいい？」

「俺、紅茶。」

「へえ、めずらしいね。」

「……そうか？」

まあ、コーヒーが紅茶かって言われたら、だいたいコーヒーてい
うのか？普通。男って、あんま紅茶飲まないからな…。

「姉貴が紅茶好きでね。小さい頃から飲まされすぎて、もう水みた
いなもんなんだよね。」

「へえ、俺の妹も好きなんだよ。家で入れると、絶対にわたしのも
！って言われるんだ。ま、これはティーバックだけど」

妹かあ…、わざわざ妹の分の紅茶入れてやるとか、こいつほんと
にできたやつだな。

俺だったら、まあ妹いないけど、はっ！？自分でいれるよって思
うし。

「お前、妹いるの？中学か？」

「ああ、二つ下の妹がいるよ。今、中三。」

「へえ。」

なんとなく無言になってふたりで、お茶を飲む。

「…あ、てかお前なんで俺の名前知ってんだよ。俺、お前とは初対
面だぞ」

ふと、さっきのことを思い出して、聞いてみた。

あいつは、ははっと笑うと、「ス波くん。先月、習字の賞をとっ
たでしょ。」と言った。

「……とったには……とっただけど。」

先月、確かに俺は賞をとった。まあ、表彰されるくらいにはでか

い賞。こんな落ちこぼれの俺が習字？似あわねえって思われるかもしれないけど、家の母親が習字の先生で。まあ、小さい頃からやらされてたら、それなりにはできるもんなんだよ。やないと、ばばあ怒るし。

なんとなくうまく出来だったから、母親が勝手に選考に出したらしくて。賞をもらえたのはそりゃうれしかったけど、キャラじゃねえし。

校長が朝礼で賞状渡すとか言い出したもんだから、はっ？！ありえん！！て思ってたんだよねあ。

「あのとき、俺見てたんだよね。」

「あのとき？」

「そう。朝礼のことについて先生に聞きたいことがあって職員室にいったら、斯波くんが先生と言い争ってて。お前はなんで、賞状すら受け取ることすらできないんだ、って言われてたよね。」

「……………ああ。」

「斯波くんは、『はっ、どんだけだよ。全校生徒の前で俺を見世物にするなっ。羞恥プレイにもほどがあるぞ！』て言って、飛び出してっちゃったんだよねえ」

「……………」

そつえば、職員室を出て行くときに、扉の前にいたやつとぶつかりそうになった気がする。こいつだったのか。

「それがすごい印象的だったんだ。すごいって思って」

「はっ、どこがだ？！」

俺はほんとうにびっくりした。こいつ何をいつてんだ。

俺は全校生徒の前で賞状貰うのが嫌で、逃げ出したんだぞ？

お前は、勉強だけじゃなく部活とかボランティアでもとすごい賞でいっぱい表彰されてるじゃんか。頭がいいやつは意味がわからん！

あいつはとても優しそうな笑みをうかべていた。

そつえばこいつって、だいたいこんな顔だよな。無愛想になっ

たり、怒ったり、しないのかな。

「俺はいつも表彰されてるときに、俺はこんなにがんばったんだぞーって誰かに認めてほしかったんだよね。賞が貰えたのがうれしいんじゃないくて。まあ…賞は別にどっちでもいいのかな。金でも銀でも銅でも、なんでもいいんだよね。」

こいつ……なにげに、自分はすごいって言っていないか？

内心、びびって、俺はあいつを見た。あいつは俺を見ていた。まったく。

「だから、人からの評価を気にしないでいられるきみが、すごいと思ったんだ。きみが朝礼をさぼって屋上で賞状を見つめてうれしうにしているの見ちゃったし。ああ、すごいって。」

「……屋上って……」

「ああ、知らなかった？何年か前に屋上で自殺者が出たんだよね。そのために屋上とか、危険そうな場所に監視カメラが設置されてるんだ。あ、これ、生徒会だけのトップシークレットなんだけど。」
いや、それ盗撮じゃね？大丈夫かよ、この学校。今時の親は、そーゆーのにうるさいんだぞ。

「てか、俺がすごいって……。お前のが100倍すごいだろ。俺は早くも落ちこぼれだぜ。」

あいつはきょとした顔をして、さもあたりまえのように言った。

「斯波くんちゃんと学校に来て、授業うけてるじゃない。そんなのおちこぼれって言わないよ。」

思い返してみたら、俺はずっと、あいつの笑顔しか見たことがなかった。あいつはいつだってやさしかった。そう、誰にでも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2734s/>

斯波くんと城島さん

2011年4月6日17時40分発行